

家庭教育支援チーム・リーダー④（兼）サポーター③養成講座 実施レポート

日時：令和元年11月21日（木）10時30分～15時

会場：秋田県生涯学習センター 3階 講堂

参加者：44名（うち市町村等から38名）

「持続可能な家庭教育支援チームのために」というテーマで、東京学芸大学副学長の松田 恵示 氏からお話を伺いました。持続可能なチームであるためには、遊びの精神をもち、主体性を生かし合いながら「他者関係」をつくるのが重要であると学び、今年度最後となる本講座において、改めて家庭教育支援に対する意識を高めました。



【午前の部 講話】

はじめに先生は「支援」という言葉がもつ印象の誤解を解きました。まず、参観者に対し、隣の人と手をつないで、指示通りに手を上げ下げするアイスブレイクを設定しました。この体験を通じて、失敗するから楽しく、関わる人も元気になることを体感することができ、先生はこの遊びの感覚が現在の子育てに欠けていると指摘されました。現在若年層を中心に、対人関係を築くときには防御反応を示す姿がみられます。しかし、自分が知らない異質なものと遊びの感覚をもって触れあうときに、意外性からの楽しさや喜びを得るケースが認められやすく、そこに関わったものの主体性も育まれていきます。「支援」には、そもそも「助けてあげる」というような意味はなく、各主体が互いに「公」の観点を大事にしなが、互いを支え、皆でつくっていくという魂が込められていると説明していただきました。

次に子どもへの支援に話を移し、「共視」と「対視」の違いや「ガイド」としての大人の役割について触れられました。「対視」とは対面するときの視線・理解の方法ですが、「共視」とは親と子どもが一つの物を一緒に見る視線であり、子どもの立場に共感した理解ができます。さらに、子どもが成長していく過程において大人は、

①「世話」する人として ②誘い「育成」する人として ③遠い目で「見守る」人として

という3種類の人として、家庭、学校、地域のそれぞれの場で役割をもち、地域総がかりで育てる必要があると強調されました。立場が違う人と一緒にできることを弱くつながりながら探る。この協働的アプローチができるのがチームワークの特性であり、「きく（聞く・訊く・聴く）こと」がポイントとなることを押さえました。現在「育成」する大人側に、知らないところと関わる「他者体験」が乏しいという課題があります。「他者体験」をいかに子どもたちに豊かに与えることができるか、その「他者関係」をつくることができると持続可能性がでくと話しまとめました。

【午後の部 演習】

午後は4ラウンドの世界カフェを行いました。第1ラウンドでは、講座テーマに沿った課題をグループごとに決めることになったため、次のラウンドでグループが変わったときには、また別の課題について話し合うという負荷が課せられました。つまり、この世界カフェには参加者に対し、午前の講話のポイントであった「主体性」「他者体験」「きくこと」へのチャレンジが求められたわけです。参加者は他の人が書いたものに向き合う難しさを感じながらも、それを解釈したりアイデアを出したりする楽しさを感じていたようでした。



最後にICTの利活用について、実際に東京学芸大学の学生とインターネット回線を使い、双方向のコミュニケーションをとることで、その有用性を体験しました。講座を通じて、自分の成長や地域の可能性を感じることができた、示唆に富む講座となりました。

【参加者の声】（抜粋）

- ・「共視⇔対視」、主体性の考え方等、分かりやすい例えで、大変よく理解することができた。双方に主体性があるからこそ、継続（性）が可能になるということがなるほどと思った。
- ・いつもは、ワークショップで聞き役に回っていたが、説明・まとめ役を与えていただいてより集中した。意見を聞いて他者に伝えるように意識した。できあがったシートは、満足いくものに仕上がりに感動した。
- ・松田先生のお話は胸にストンとおちた。自分の失敗があつてこそ支援に生かせるのかと思う。